

134  
16  
268

東 京 圖 書 館				
一 六 冊	三 八 號	六 五 架	一 三 函	和 書 門 傳 記 類

藝備孝義傳

廣鳴

卷一



二編

藝備孝義傳

藝備孝義傳二編序

孝義傳初編既成二編

又成是皆吾

大公之命也初編自

自得公從封之初至



藝備孝義傳二編序

孝義傳初編既成二編

又成是皆吾

大公之命也初編自

自得公從封之初至



大公臨國寬政三年二編  
續之終于其

告老之日也其鏤梓竣事及  
今公襲封之後臣竊惟  
大公勤政治民亦已久矣

嘉猷茂績固為數端如  
是書亦其一也

今公孝順謙虛善述其志  
常懼其美歸於己及是  
書成亦誠惟完等曰此



吾

大公之志也而其修撰亦  
多在其臨國之日予  
則不與也而人或謂予  
襲封後事則以其德  
為予德以其政為予政  
於予甚不安汝等其志  
於策以著別之宜顯  
大公之德也  
大公聞之曰何傷也贊述



相及古之道也奚必拘  
然

今公尚猶退避不敢有  
臣  
等於是益知

兩公仁孝之實以為吾  
風  
化之源孰不並拜其

德音焉耶自此以往孝子  
義民益出愈旌續之成  
編何有窮已謹書諸首  
簡今讀是書者知本藩



孝義之有本其本深固

如此

享和三年癸亥春二月朔

藝藩教授賴惟完撰



藝備孝義傳二編序

年々徳むつびの家あたりに徳ありひたりは  
竹のうげみいかりをけしひたりはそを植むを  
めいりし植けり一日そをのめりしそを  
まじ物ぶたりせりま。新しき書冊のうつくしの  
よみあるをそをくくつひのめりしそを  
ちりかちあつたまはこれをもむかひて  
君のおちせをうけてその人その人あつたり



あめ家 孝義が續録 せんは侍連 孫の午庵  
 てふ人ぞめきたる 見はしめんと出づるは  
 二人の着ちてあつてまゝとていさゝか  
 ひらき見つゝとあつて着あつてけり今  
 君あたらたまはつ里ごちきまゝなり  
 父君の御志をよくつぎあるは仁孝乃  
 由事をよく述べたあつても石清水たえぬ  
 流のいや海一と海一と思ひてせん久米の

さいらふさいらふ 海一あたまゝとてけり  
 よ孝あれを下まよおとむり理よとより  
 すぐなる民草おまげくとまゝなり  
 孫ようしつゝとあつて海一とていさゝか  
 竹の着うちてあつて海一とていさゝか  
 いさゝかおあつて海一とていさゝか  
 海一とてあつて海一とていさゝか  
 あつて海一とていさゝか











此の如くあるも、世の世に書かきのからく入るる事  
 して、世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき  
 たまふ様よう多し、世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき  
 玉たま年としあけく、世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき  
 人ひとの世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき  
 めし、世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき  
 人ひとの世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき  
 又また世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき

華はなをゆつ、世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき  
 ひとつ、世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき  
 世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき  
 二人ふたり世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき  
 世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき  
 世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき  
 世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき  
 世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき  
 世の世に書かきのからく入るる事、世の世に書かき







此例よりあらひて、卷首より出、正史の文をのせて、  
圖を置

一初編は移封初より寛政三年六月よりなり。  
此編はそれより續て同一十一年八月よりなる人数  
百八十六人をゆり、これより及、第三編は入る、  
傳文は体をもひ、假名づもひ、定其外は例とよく、  
初編より今ま、とよみ、

凡例終

安藝國節婦





貞觀十四年十一月廿六日壬戌節婦  
安藝國佐伯郡榎本連福佐賣叙位二  
階免戸内租表於門閭

右見於三代實錄

按類聚國史亦載之

又按一本十一月作十二月戸内作  
戸田門閭作門廬有郡名無戸  
名

又按ずるに依佐伯の節婦たる天朝の御  
賞を蒙りたれど旧史よそのの状を載さ  
れはとよりハ考るに由り其後も美言  
奇行るきにあらざれどもあらをれず  
てやろざるもの數をしらぬ近代はまた  
褒賞おらざるをれて民間の事ハとく  
録されれども士人の家れるハあるに共  
もろくて年経るまに知ものもろくか  
りあるハ於うらみるまにあらすこの度



府士の家もむくより美事あまてあるが  
中一人の烈女ありてよそのものをあげて  
かの上代の節婦よつらぬ

節婦奥氏

節婦名は清江の府士奥氏重宿がむすめ  
ありある歌夫一柳源多南江戸におもむく饑宴の中  
江吉斎が宅にて余語強き事を打てて  
公裁をすまらして腹ききとて笑悟一先が家よ  
いひやりて切腹の刃させんとて中村市を

いよせ東師のまはる居あひするをして行きあ  
と一けるよあまをかる場おまをて逃りるを人  
よいとれんも口ねらうとげはゆ女のゆるもこと  
くれが源多南さいよ和腹うれしそたのつれ毒ある  
ものもさきでずよおどろく考もまかりほど女れ  
いともしはもかきまめてはもをんてはむら  
がて行て事れ姓あといひまを判きのをれを  
斗はしめてよといひくれはもをんてはむら  
中江が門をせるとかの身れ上とこがぬよ



ていとあそれまや。あひらん。浪見坂橋本の。浪文  
 の橋を。おろり。旅衣かき。と。あひまや。命か  
 りけり。ふ敷の中山と。うたひつ。一柳の家より。いり  
 ちろく。れよし。を。つげ。りける。に。清女。ら。い。き。て。  
 武士の。うら。ひ。る。れ。が。も。非。及。い。ま。び。上。の。用。き。れ。その  
 を。と。て。ま。づ。う。い。白。小。袖。と。お。中。一。ま。余。の。物。も。あ。る。か。こ  
 う。く。徳。め。て。人。に。お。せ。ま。一。る。市。を。い。ぬ。こ。も。ま。こ  
 盛。久。と。り。返。一。粒。ゆ。く。や。星。月。夜。と。祝。ひ。て。中。江。が  
 方。に。ま。返。り。一。も。お。ろ。り。衣。着。わ。り。一。言。簡。も。古。武

者。よ。て。ま。前。の。斗。ひ。よ。記。き。し。き。や。も。あ。れ。と。清。女。の  
 事。よ。あ。つ。ら。い。は。ば。い。ん。の。せ。ぐ。か。つ。て。あ。ゆ。と。源。太  
 八。中。江。が。宅。よ。て。自。裁。と。ま。り。ぬ。れ。が。清。女。の。親。の。許  
 へ。か。つ。り。て。年月。を。経。る。よ。その。家。の。う。の。ま。か。く。一。て。家  
 ろ。る。と。あ。そ。れ。と。再。嫁。と。せ。中。江。く。あ。ひ。て。対。す。あ  
 る。れ。と。も。か。つ。て。承。引。せ。ざる。に。よ。り。て。皆。さ。ら。く。か。れ。が  
 許。諾。を。待。た。い。つ。と。も。調。の。取。り。と。あ。ら。う。と。お。ろ。り。は。ま。さ。き  
 算。と。さ。う。だ。め。日。を。え。ら。び。て。結。納。の。儀。を。行。ふ。に。あ。ら。う  
 ろ。り。て。清。女。よ。か。つ。と。告。げ。せ。ら。れ。た。け。し。い。り。の。お。ろ。り

忠臣蔵二編 巻首







ちぢりぬれば、つとて誣いふく心ひるるに、泣女なみよが年とし以も  
 め一つひるるお婢こまごの、それ及およ人の妻つまとありて、年とし六む年ねん  
 まで、うがりつとり、け年とし痛いた死して、なり、ありて、考かんれ、か  
 の墓かみを、と、除とせ、け、女にと、と、ま、け、上かみ義ぎを、好このめ、  
 下しもま、義ぎを、す、む、ら、ひ、る、れ、ば、主しゅ人の節せつ義ぎを、感かん  
 たりと、思おもて、か、く、る、人ひとは、泣なく、ま、る、れ、厚あつく、り  
 くん、或ある人ひと泣な女にの事ことを、悟わかり、け、る、は、け、婢こまごが、つ、に、及および  
 され、ば、こ、に、泣なけ、る、一ひとぬ。

藝備孝義傳二編卷一

廣嶋

天満町京屋喜喜屋同妻 同町甲立屋弥八

五町目きよ 新川場孫六妻

善八子松比席

革屋町忠八

新振治屋町吉田屋金花惣八

十日市町大塚屋理三席妻松

阪原的坊桶屋清吉



平塚座以理和一同妹とて

堺町座以喜代聖

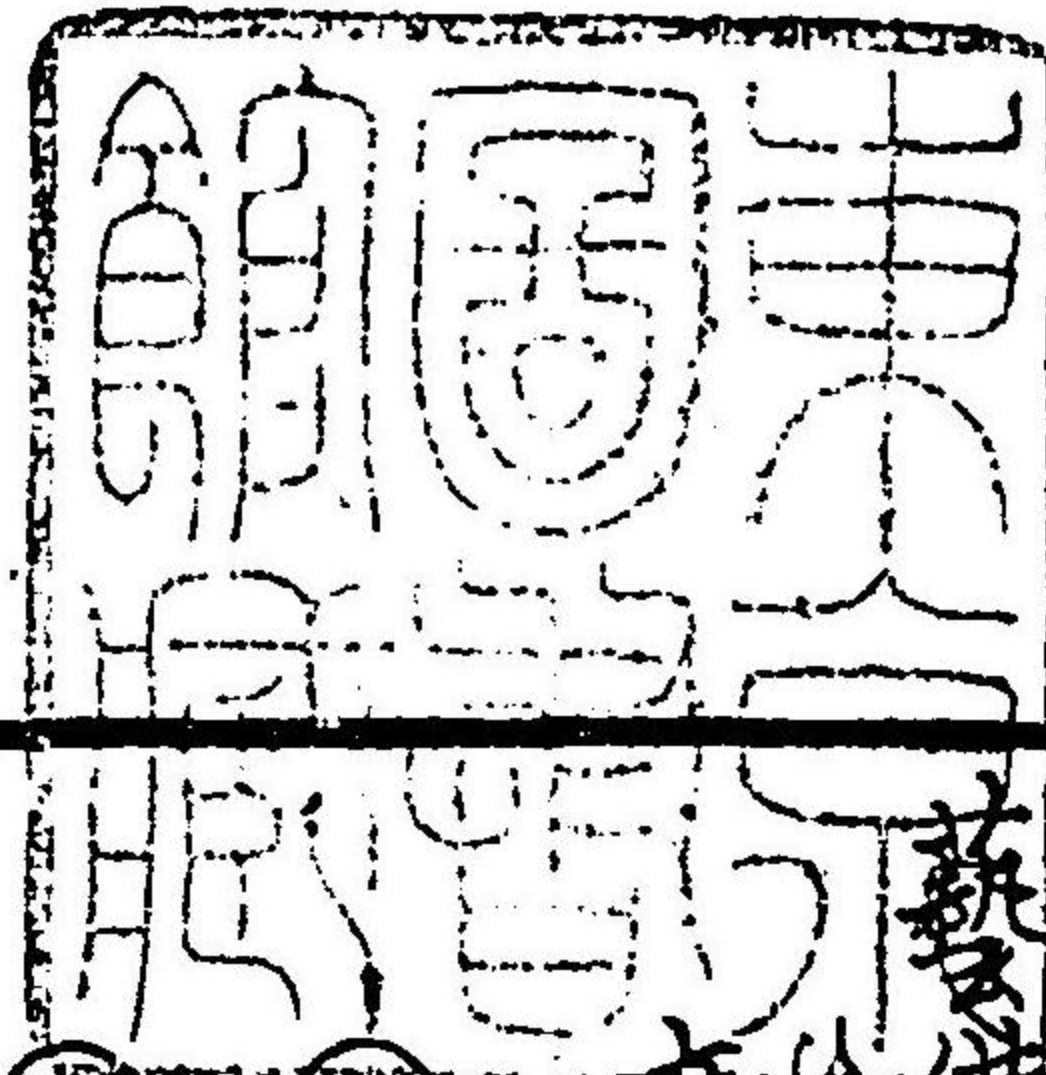
西魚座平七姉か子

廣瀬祖と三郎権左郎

空鞘町本座久之三郎下人六吉座

寺町五味座茂七同妹とめ

橋本町佐伯座茂七女あで



藝備孝義傳二編卷一

廣嶋

○天満町京座喜三郎同妻つとめ○同町甲立座孫八

○五所目きよ

○新川場孫六妻

○善八子松江座

喜三郎ハ、京座三郎喜三郎ハ、婿養子多ク、母父死して、母  
のこありける。風ふあてられ、起居かまひざるを。  
夫婦いそりあつふこと小兒とて、あつふまゝのま。  
あつし、妻りついにねずして、病、母才すかりて。







忠八は借金を利き過ぎ子あり。母やもめとあつりて卯よ。  
 子もおろけれど。貧窮する。お八がふよまて。や  
 るる。お八は毎日足袋をよかよひ。足袋をぬいで  
 賃をゆるおは早く起して。お八物をとくの。母を  
 起してそのぬくお八と。お八はあつりて。お八は  
 ちかひて。お八はあつりて。お八はあつりて。お八は  
 おる。ぬくお八はあつりて。お八はあつりて。お八は  
 もとめて。母よをくらひ酒り。お八はあつりて。お八は  
 るれ。お八はあつりて。お八はあつりて。お八はあつりて。  
あつりて。お八はあつりて。お八はあつりて。お八はあつりて。



お八はあつりて

お八



うつし心もあらざれば母の心もさるるして目の  
 おに重なる一くおもふ。お八はまさとあつて二人たよ  
 りが方よしわたをり。曾孫をもつて一ぬる皆病死  
 せり。末の妹夫よをくれ子をつれて貧しくるやみ  
 けるをすこ親子ともによびよせぬれば母さるはこ  
 収ふお八年四十ふあまりて。於妻をめとらす身とる  
 しめて。孝友をつくす。寛政五年二月十日米七俵  
 たまりける。これより。お代聖つまで。夢をかうめる。  
 年月日。さか同し。

○新編海防町吉田を金花お八

金花お八は。吉田を吉田つう二子あり。兄弟たよ。  
 父母よつうて。孝あり。金花ハ。年以か家して  
 居よりける。父母や。老衰よ。よひければ  
 金花妻子をたづさく。ゆりて。親をや。まふ父  
 ハ。中風をや。こける。うもとより。や。い。ま。さ。ら。る。  
 性質よ。て。さ。ま。り。く。の。幸。な。こ。て。い。ふ。子。ら。さ。か。と。む  
 うず。之。四。年。此。間。兄。弟。力。を。ま。り。め。て。い。り。り。ら。  
 父ハ。遂。よ。世。を。さ。り。ぬ。母。ま。し。お。か。よ。か。ま。し。



これバ兄弟又深くこれ以新業いろくのことを  
るける妹婿ありいつう病人よるりて世を  
さかぬけられぬ志をらく金花が借家よ移るをせ  
畱ると買あてくるるが遂よ妹夫婦子四人を  
我家よつとくあつめてこれをもろくみ家内十三  
人むつましくすまけるよ。きこえて兄弟よ米  
十俵たまりぬ。

○十日市町大塚屋理三郎妻松

まろい度隙の農民久七がむすめあり理三郎  
病死しける時舅伴七とすてよ七十六より松  
うやまひいとむこも甚あつく人よやとをれ  
てい交れ睦よ背をさうらうみつむぎてい冬  
あも曉よいゆる年中いあういあて舅や  
るひ衣服さかやきうもいあういあて舅や  
まろいぬさうがまは垢くきんあういあて舅や  
いとよいあういあて舅や

○阪原的坊桶屋清吉

清吉の桶匠を業としてよく老母をやうま





あつきびり近き河原を真向の交をよま河原を  
 その外寺とりつらも社とりつら社に入る物びく物  
 母の心は随ひ己が背ひつらをひて興ともろ一馬  
 ともろて母がひまくらひひりうらお買てある  
 き奴があをれるることおなわらう一才伊ハも亦  
 孝心あり法者妻一むくつら一がられも夫もろの  
 ひて孝義をそげぬとも

○平塚産の理和一同妹とて

理和一は人よ第三味線をもとく妹とて同居



して共ともよつてもおもたぬが二人がたぬあまの母と  
 やしるふ母七十の比より中風ちゆうふうれやうにやまけを  
 兄あに才さいして親おや善ぜんいつさういつよるとすて廿年にじゅうねんれ  
 間まその神かみ妙たぎること人のまよらざる事なり  
 母ハ年九十にじゅうきゅうして死しぬるが親おや和わ一いつ兄あに弟てい甚たつ惜しやく  
 るげきりかたぬよすりうつき柩こをるが泣なみすくるとまよ  
 みどり子これ母ははをきよよとるらすとる人ひとにみ  
 感かけはるはと親おや和わ一いつ七十しちじゅうにあまりとてはた  
 十じゅうあまれりかくて親おや和わ一いつも老おいつうれれは筆ひつ

かるつることさくろりかたけれはそと親おや善ぜんして  
 兄あにとやしるふこと年としを經へてたのます兄あに弟ていおと  
 らぬ殊ことごと縁ゆかりのもれるれが紐ひも以もち多た件けん一いつ等とうとて二人ふにんは  
 米こめをこくたたま賜たまをらせたる世よ又また同志どうしひらどかか  
 一いつきまのりあらざれい古いにしへれ聖せい人じんも替か目め老らうをこ  
 まく顔かほをあらはめするといひたはまよまよ人ひとれ  
 心こころをさるられいんれをさるてもあまのりら  
 ねいふ替か目めまよむこしはまのりらまよ  
 たくらとむむらりききをねむるも目めをまへんはかた



れるもあつたまじりんの理糸一うらまはんにあつた  
糸するに足ぬぐ一

○場所 彦頭 義代 聖一

義代は一のふくみる一とるりて親親のうまに  
まづすれてゐる一う左聖一とらふもの親がふ  
るりてまな一とらふら子とらふ一ぬきま一既よ  
老年にまよびてその職のこもまも侍るされば  
又左聖一を師ふたのこて習ひ一めけるまよひよく  
おとろくられは喜代野一側をさるれずいこりしう

遂にむろくろりぬその後妻の母もまよひ三年をうり  
やまて死したり年ごらは病人よ家いこまづ一く  
るりければ葬儀も人の物借ていとするみまのまよひの  
才いみじきものよて按摩導引るまよひ一能いとするみ  
かせぎてかう債を後ふのこまらば家は徳よまづこ  
居るまよひけみけぬまよひ孝の父よ実子二人あり  
まよひ一おもくらく家業の目れ傳へて家財は実  
子よあつた一とやうて家も調度もまよひかの二  
人よゆづりてこい寛政の檀家と不動の像院院一





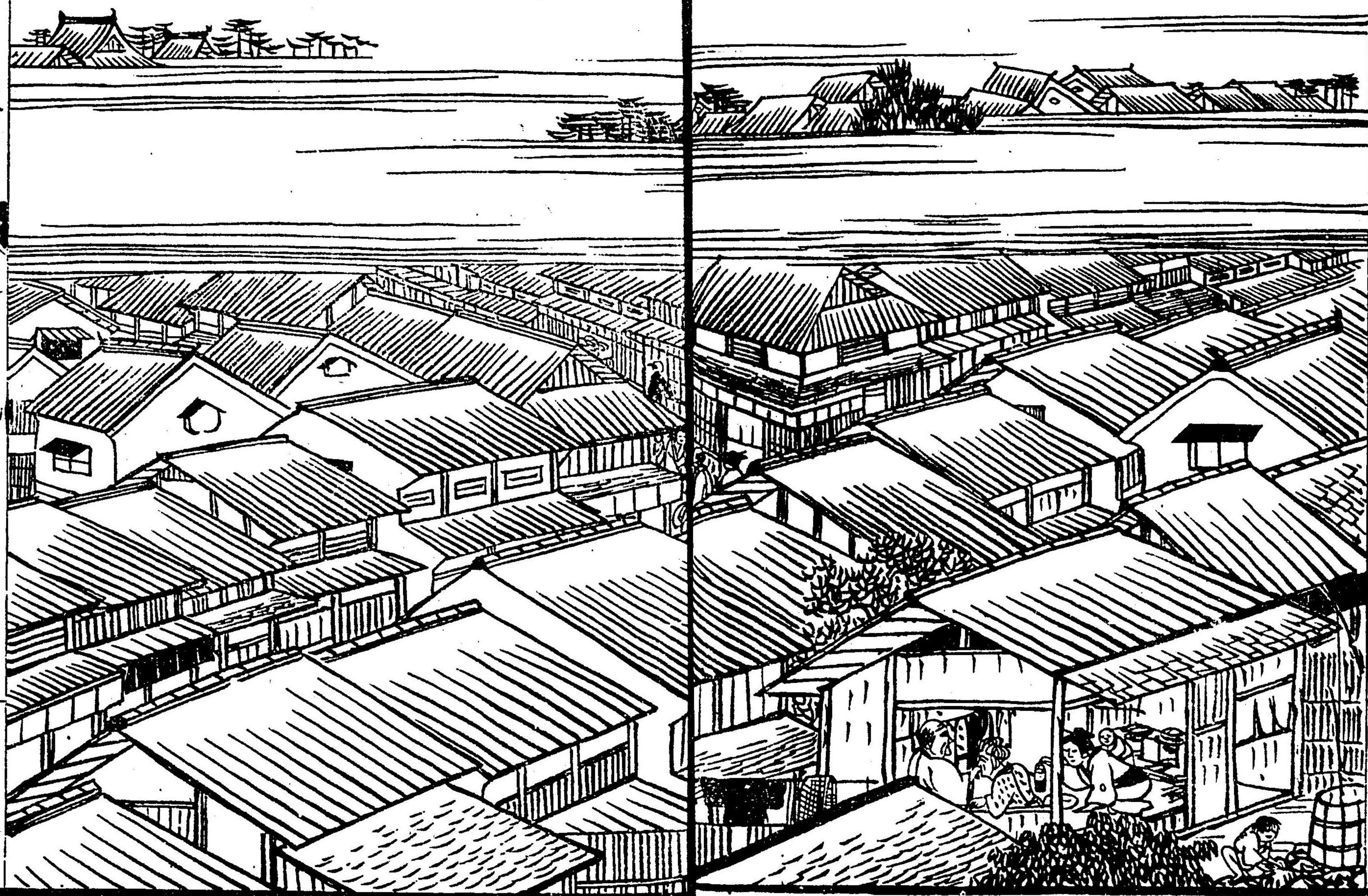


乳幼ちゆうせうめるれば、存生ぞんせいの内一人うちひとり此こゝ人ひとをむこ番ばん子こよ。  
 して置おけり。きよは一ひと無なふ。これこゝをうらうらとやうて。こが  
 物もの出して。孝父きやうふの名なをさぶらうりせ。職しやくも。はげんはげんふらけ  
 若わかまゝ病びやうて死しけり。かの男子なんしや。成長せいぢやうして。傘かさは  
 巾きんひをほくり。世よにたすすうとる。あつるうらとれま。  
 あや一ひとくやと出て。更さらまづ一ひとくうりければ。きよの  
 心こゝろをくす。何なにれと力をそくり。番ばん家かは弟あにもま  
 世よにさうりかぬれば。折おこよ物ものをあつて。にぎはぬ。  
 父母ふぼれむらひいふよ。及およびず。養家やうか師家しやは年とし忌きも。  
 皆みなきよは一ひとが方かたで。いとるをける。かれ。只ただ孝義きやうぎよ。  
 あつきのころらず。産法さんぽうも。まこ。はとめ。をげとて。  
 たらひ。まれるも。けるり。植枝けんげを崎さき島しまのの上うへ  
 くれ。寝米ねまいと。こくを。下くだされける。

○西魚登町平七よめぬかぬ

かね。佐伯さへき野地のち前村ぜんむらの民たみハ左衛門ざゑもんがむすあるり。  
 十七八じゅうしちはちの比ひ。廣崎ひろさきあいをや町まち。森もり七しちと。りふものつまと  
 るり。居ること。五六年ごねんどかりして。夫おつとをい出です。年とし久ひさ  
 しく。とづらひて。遂つひよとて。り。舅おやぢ始はじめよとひす。でに











餘のことははらよまかすずともせめて好物をばら  
せしことなきうらよりの。いとるみて日ごとく酒をすめ  
けるとき。寛政五年七月廿七日。嘗て米七たごらるを  
たすとりける。

○廣瀨征と三郎権左郎

廣瀨の細打小治よと三郎権左郎とて兄弟孝るもの  
あり。父布き毒死して母ハ独るく世よとすれどけ  
あかるも目もさえず兄出て米をうりありけり。  
弟ハ家よめて米をつきつ。母をさる弟出る時は

兄弟のいさうせり。益あたるく一人のかるらば  
あつた兄やまをるれが弟も中しあつ一人すむれが  
兄弟もこの一回よりいへる。あつるる若  
るれバ二人よ米あつて嘗てまよかぬと一  
るり。

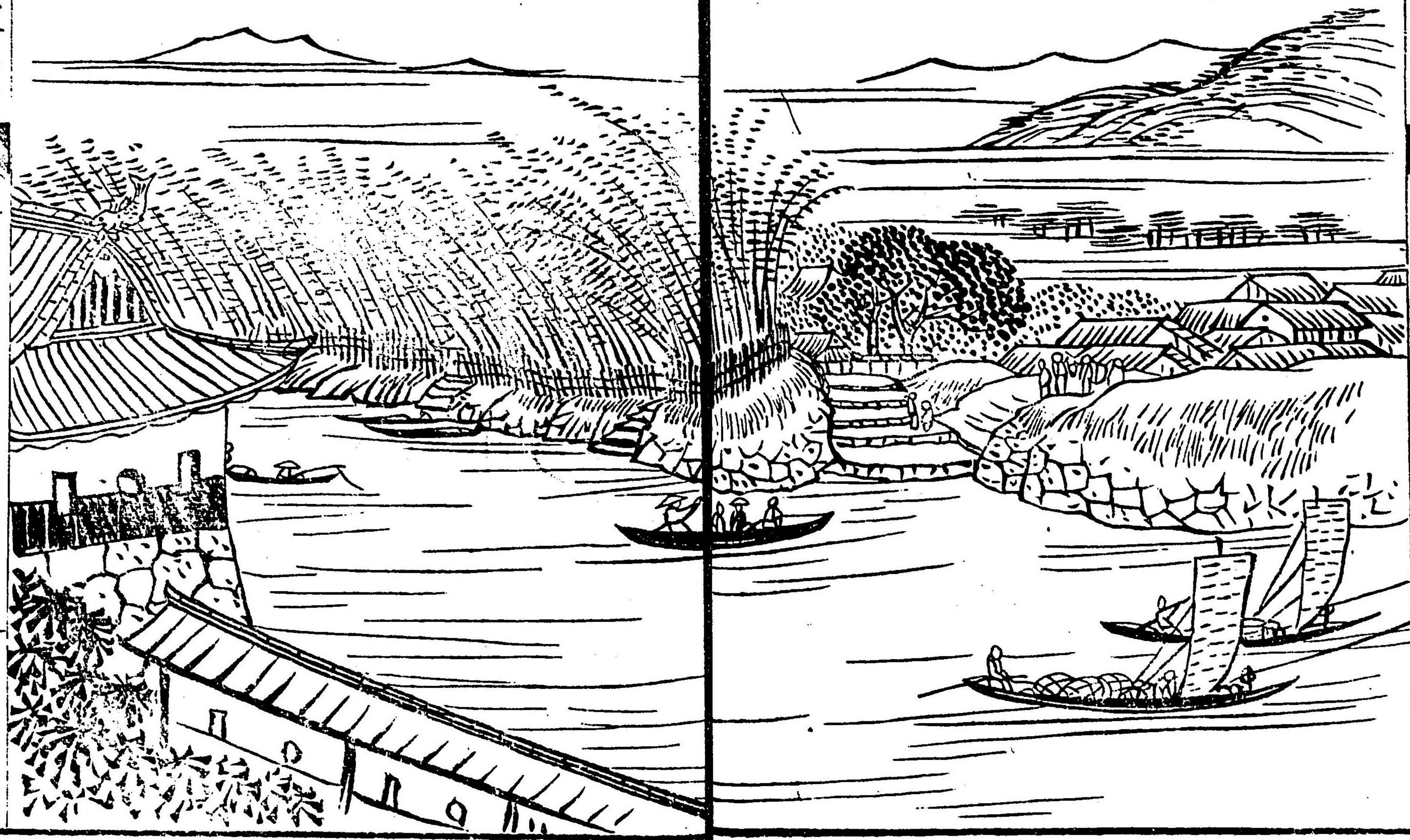
○空鞘町木登久三郎下人古き傳

古き傳のいもと。空田登久三郎。農民の子よと。十五なる  
と。廣瀨よまの。木登久三郎が家よ。つうくららる。は  
り。あつたよへく。事つて。あつた三郎は。田を























いとけふるまひものゝためにもなほしむるにけり  
 も一人よむにけりたふもなほしむるにけり  
 たるまはまことよむ心より出づるといふて  
 あそれよおもしろ。寛政十年十二月のことより  
 君はまた進してその孝義をふめられ母にそれと  
 格別の沙汰を以て死罪をばゆるされけり。

藝備孝義傳二編卷一終



藝備孝義傳

沼田安藝

卷二

東 京 圖 書 館

和書門

傳記類

三四函

六五架

二六號

二六冊



義傳二編卷二

安藝國沼田郡

中調子村十三席

温井村次之席兄弟

後山村仁之席同妻少之同弟八席之席

後山村内畷田百姓十二人

八木村六之席同妻之席

西原村七之席

打越村七人

同村甚稀



打越村仁三郎甚花

安藝國安藝郡

奥法田村忠右衛門

仁保崎源七

坂村貞四郎

矢野村由喜右衛門

上瀬野村茂三郎女守

江田崎喜右衛門

戸坂村又平

同村忠茂

戸坂村嘉七同姉きり妹ひち

源才左

同村嘉之七惣左衛門

瀬戸崎太郎平手代忠三郎

府中村六三郎後家あさ

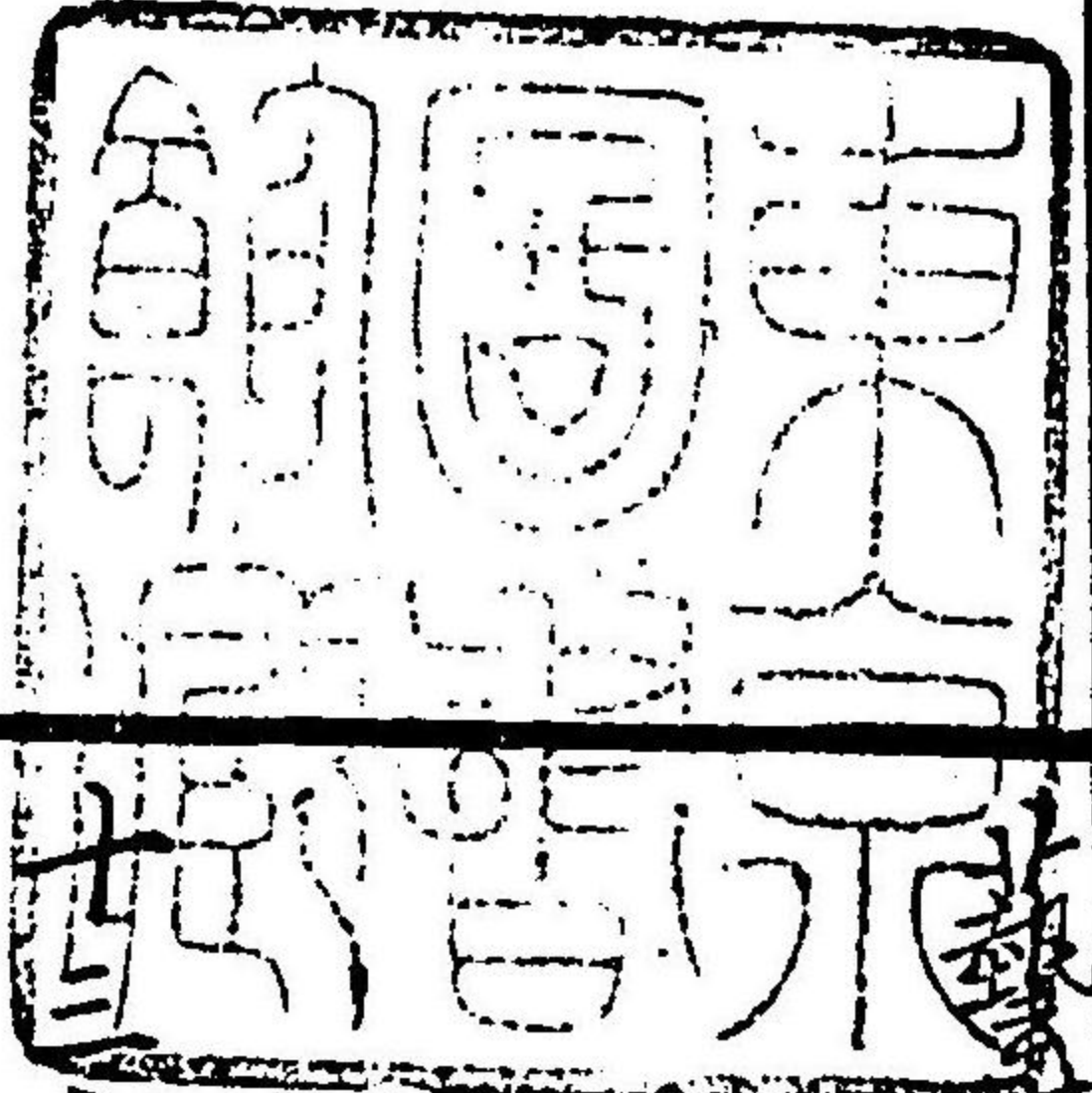
倉橋崎権之助妻きく

警言園五村半右衛門夫婦 蒲刈下崎新之助

焼山村佳景

同村よ





備前孝義傳三編卷二

沼田郡

○中調子村十三郎

郎ハ父も良民なり。染そのさきどうひつさよく

父母よつうしてす。一もそむくことさる。先祖の志

日又あつと弟よことともいと誠実なり。又上をうや

まふ心あつく。農事をつとめ年貢を。つらみ

毎年さうとくをます。おろく納む。繩たさるも

委曲よ心よ。おろくひて。うら。く。のよ。録。家内



むつすく人と交りて、信をうしりて、一村その  
行ひをめぐり、こゝにけ人をかみとせり。寛政三年十  
二月廿七日、瘞錢をとりける。

○温子村次子嗣兄弟

ぬくぬ村の百姓八き南の子六人あり。上三人の女子もて  
こゝに人な嫁し。下三人の男子もて、次子孫茂子新八と  
いり。こゝに孝子あり。農業も出ても、日よらく度とせり。  
家にかつりて、父母の安否をうかぶ。女子も一二日の  
うらみのかきさらば、来るてかつりて、一年母いたく

病て、百葉をうしり、あらば、はういハ神よいのらとやと見  
弟お謀りけるよ。一人の病床をともせり。からず茂ら。  
内は居て、次子孫新八二人比も。正月、縁をけり。よきよ。  
毎夜およけて、あたる大川に入り、水垢離して、祈念  
せり。神威ありて、母のやまひ、やうやくいえり。父又  
中風を病けるよ。冬、火燭をこよすがれが、三人父の  
ほよよ。各父のよきを懐に入れ、あたるあける。  
茂子孫つよ、父存生よ。田畑をこけ、新八よ、いすよ。  
こけ、ごりごり、か、次子孫。ごかちとんとす。新八、あて。







かくおろく、とけたまひてハ、本家よのころふらく  
 ざらまゝ、そのまゝ、いふと、さう、またまゝ、いふと  
 いひて、かたく、いふと、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 うけし、家財も、あり、おろく、いふと、いふと、いふと、  
 る、いふと、いふと、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 ゆづりて、やま、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 たりぬ、いふと、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 けれと、いふと、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 き、いふと、いふと、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 人よ、いふと、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 下、いふと、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 年、九月廿一日、いふと、いふと、いふと、  
 ○ 後山村仁吉、同妻、いふと、いふと、  
 仁吉、初、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 八、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 上、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 居、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 茶、いふと、いふと、いふと、いふと、

○ 後山村仁吉、同妻、いふと、いふと、  
 仁吉、初、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 八、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 上、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 居、いふと、いふと、いふと、いふと、  
 茶、いふと、いふと、いふと、いふと、



八高き岳宅よゆらんとりんバ仁き母すものんち員てゆく  
 八らき母もすんちうせつちのちもふんちのちもふんちの  
 じとく一てま家一家のじとくありんる父つひよ糶を  
 好一くが毎菜田のじとくももち米をつくりて毎日  
 茶を煮るかまのよもすじとく蒸すのじとく一ひ  
 暑天よ味損じやせけれバ一日よもなまかんのじとく  
 してすめける父の九十三也よもをりぬその後母よ  
 つくつて程厚一二年仁き母が牛死たることあり八らき母  
 ありて牛もくつてはあまらすすられもたすけ進らせん  
 りとよももとめたまらんとりよ長九高も合カすくれと  
 家よあれびひよまかせす実父よりかけ置ては  
 長九高よあしあるとらよたのも一銀もものあり  
 それを引あてよして人より銀かりたすくとひて  
 遂よ牛をかえせけり兄弟親睦することかくのじとく  
 すも母が牛の死たるとられあるがためよそれを  
 るぐさむるさもあまらし仁き母が妻も夫よあらひて  
 孝養をるつと厚かり一くハ寛政五年七月十六日  
 仁き高夫ぬよ米七俵八らき高よ三俵下されける十一



年七月廿一日、少つてび賞せられて、仁き徳よ五俵八匁  
多系よ三俵、たよもりぬ、長九匁の、養父よ、孝あるを、  
以て、すぐよ、寛政三年、初賞をかうあり、又九年十月  
廿一日、再賞をたすりぬ、お編る官郡よ、つぎびらか  
あり、兄弟三人ともよ、旌表をかうありぬ、めでたき例  
ありりたる。

○後山村内畠田百姓十二人

久三郎 半三郎 林七 平吉郎

傳七 長四郎 幸四郎 甚三郎

文花 甚吉郎 与七 与平次 後山家

畠田の、山歳額十五石もたらすして、民ハ十二名もかり  
ありけるが、家作りより、衣服容具よ、あるまで、すぐて、  
かざりもく、古風をすもりて、嫁娶も、すちた、く  
は、一いつ、と、り、結ぶ、むく、より、い、さ、か、争訟の、も、  
あらず、上を、敬ふ、こと、あつ、く、して、年貢ハ、いつ、も、よく  
納め、且、繩、た、も、ら、の、よ、を、あ、ひ、ま、で、他、お、よ、り、ひ、と、き、い、  
き、よ、ら、か、る、り、た、よ、も、り、た、う、ひ、よ、す、め、ら、れ、ひ、  
あれ、が、お、め、ら、し、て、古、人、の、お、説、は、業、お、勸、患、難、お、恤



のち一いふ由地とたふらざりければ人ごとよ銚せう百文  
たまりりて、其善俗ぜんぞくをやめらる。寛政五年七月十日  
あり。

○八木村六右衛門同妻さか

六右衛門ハ幼少ちようせうより柔和じやうわにして、父母よ孝あり。さかハ  
同村久之席おなむらひくさむすめあり。六右衛門商人あきびいされハ、常子  
可部町かべは往來まうらうも、りつも、土産みやげとして、父は酒母さけは、鑛くわ  
菓くだものと進まらす。父ハ、たんりよする。性せう質しつとして、一日、六右衛門  
るありて、倒たふより進まくか、つりければ、父、酒さけをす、ら、か、は

たるよや、氣色きしきあ、く、と、けり、ち、り、常とこより、も、い、と、  
さ、ら、顔色かおしきを、わ、ら、げ、な、れ、て、り、と、ま、い、酒さけを、あ、た、め、  
いた、け、る、よ、と、の、器物うつてものを、さ、げ、ら、う、ら、且、怒いかを、う、つ、て、  
サ、新たきの、た、く、と、く、す、く、さ、ま、も、過失あやまちあり、と、家内けい内の人、を、  
お、ひ、お、く、る、と、の、夜よハ、雪ゆきあり、つ、つ、と、て、踏ふも、た、と、さ、ん、か、り  
ある、よ、ち、ら、夫、婦、や、う、て、可、部、よ、り、き、酒、新さけを、か、ひ、て、  
酒、り、さ、ま、く、と、い、ひ、と、い、て、その、夜、の、夜、ま、を、か、り、よ、  
や、う、く、怒いかを、さ、ぎ、て、酒、を、の、け、り、父、す、こ、近きんお、の、人、よ、  
ひ、か、こ、と、い、ひ、か、こ、こ、と、ま、さ、ち、ら、ひ、と、う、よ、ま、を、家、よ、ゆ、き、て



こひ言すよりして人まにれをゆるは。父病よゆて  
 ちあけけるが。貴き業をばのむく。うらむをり。あやむ  
 ことをゆるず。しつらりて。それの。つて。價十銭もの。あやむ  
 いひて。すあける。父が。まかり。一時。夫婦。かち。むと。と  
 ぬかく。は。忌日よ。あつ。り。お。わ。く。外よ。出。す。て。つ。て。い  
 居。ぬ。り。父。死。後。母。よ。つ。り。ゆ。る。と。と。又。厚。し。ある。人  
 お。ろ。よ。と。い。て。常。よ。き。こ。か。よ。ひ。に。お。日。や。ま。  
 と。ま。り。て。商。ひ。せ。り。利。お。お。か。く。し。と。の。渠。こ。い。て  
 吾。も。と。る。こ。い。と。よ。お。も。と。も。た。だ。母。の。待。と。ある。の。と



新編 忠臣蔵 巻二



ららば吾もまことんやすからうれば他およ宿するに  
あさりまといひしとて寛政五年七月十六日夫歿す  
米十俵たまりりけるその孝忠をいたらざるす  
まして同十一月七日廿一日まじもとの如く下なる

○西原村おき翁

おき翁ハ源花が子なり父母よつて孝順なり母  
死して父後妻をむらたるとれよつてあるまじ罵し  
父死して後継母再嫁せんをけをたき翁おかく  
られひ人をたのめてしあけれとまかすてゆか  
ひく入れもとのいふくしとておき翁よりのこひて  
中風をやくたふよたき翁夫婦力をつくしてこれを  
やするふ又叔父三人ありこれよつておき翁のあやうし  
一人の叔父病て且まらうく田地を人よりのたりしを  
たき翁かひもどしてあつてりまじ叔父控を翁が  
妻病氣の時力をあせて病せりたき翁孝状と  
官よりたぐいのえたる時控を翁ごの妻病よせ  
時たき翁がまことんせしをえりかれら母子



つりあることともかり知るべくいふ所けるを寛政五年  
十二月朔日米七俵たすりる

○打越村お八 ○同村甚花

お八の父を甚花といふ人の家をかりてすし居り  
しが、いふもいふに、いづかの家をかまへて父母といふいふ  
位しめんとおもひて、さうりよ農業をさしび、  
うりて、遂よ一家をさまうけ、お教を安居させしめ  
ける。父の妹子をいふて、やもめとさうりたるを、これを  
むりて、すめやうよ、やゝさふ。父死して、及び母と

同く、うやまひつゝ、くれば、母も姑も、すりこひて  
くらぬを、甚花の父を吉帯と名とり、お八の家をうりて  
牛を、すし、いづか父をさうりて、病死しける。甚花は、  
口惜とおひひて、力をつくし、遂よ、家を、さし、さるひて、  
母を、や、すん、たり、母、かれ、う、か、よ、婦、を、とり、いづか、を、花、  
あ、よ、む、う、ひ、て、さ、ん、ち、い、づか、家、を、来、て、い、こ、う、母、の、さ、よ、  
を、た、が、よ、と、と、ある、い、から、す、この、お、さ、ん、ち、よ、の、を、む、す、  
る、と、い、ひ、ける、が、甚、花、も、さ、ま、い、な、い、つゝ、い、め、り、  
けれ、え、と、の、縁、を、とり、て、甚、花、り、と、の、縁、若、行、れ、ある、



丁、寛政六年二月廿五日、あつりよ、米之俵づら、かづけ  
たまりりぬ。

○打越村仁之助甚花

仁之助、甚花り、与三郎、二子あり、母の、をよく  
す。父よ、つくり、孝あり、仁之助も、よりの、質素ありよ。  
節儉の令、出てよりの、烟草を、すの、さるよ。父の  
ことよりの、ゆも、費を、惜まず、父の、家を、ゆづりて、孝よ  
遠近の、神社、仏寺よ、まう、く、目を、送り、仁之助  
ある時、城下よ、いき、赤白、松原、通り、まで、措鉢を、こ



打越村仁之助



むくをひりひりがかまらず。れといたる人。なほ母  
 る。と。きど。立やすらふ。うらよ。折しも。雨。降り  
 出たり。於山田。おとりの家の軒下。入り。あやどり  
 して。待。よ。果。して。おと。したる人。来り。けれ。仁。之。節  
 よ。ひ。う。けて。かの。措。鈔。を。返。ぬ。その。人。と。る。り。知。る  
 づ。い。ふ。飛。の。別。家。せ。は。も。父。兄。ま。う。や。ま。ひ。つ。う。あ。る  
 こと。あ。つ。く。して。夫。婦。も。も。お。又。来。り。て。安。否。を  
 た。づ。け。又。何。事。も。兄。が。い。ふ。ま。ま。に。ひ。ける。寛。政  
 五年。二月。廿五日。兄。身。は。瘵。病。を。た。ま。り。り。と。差

あり

安藝郡

○奥油田村忠太郎

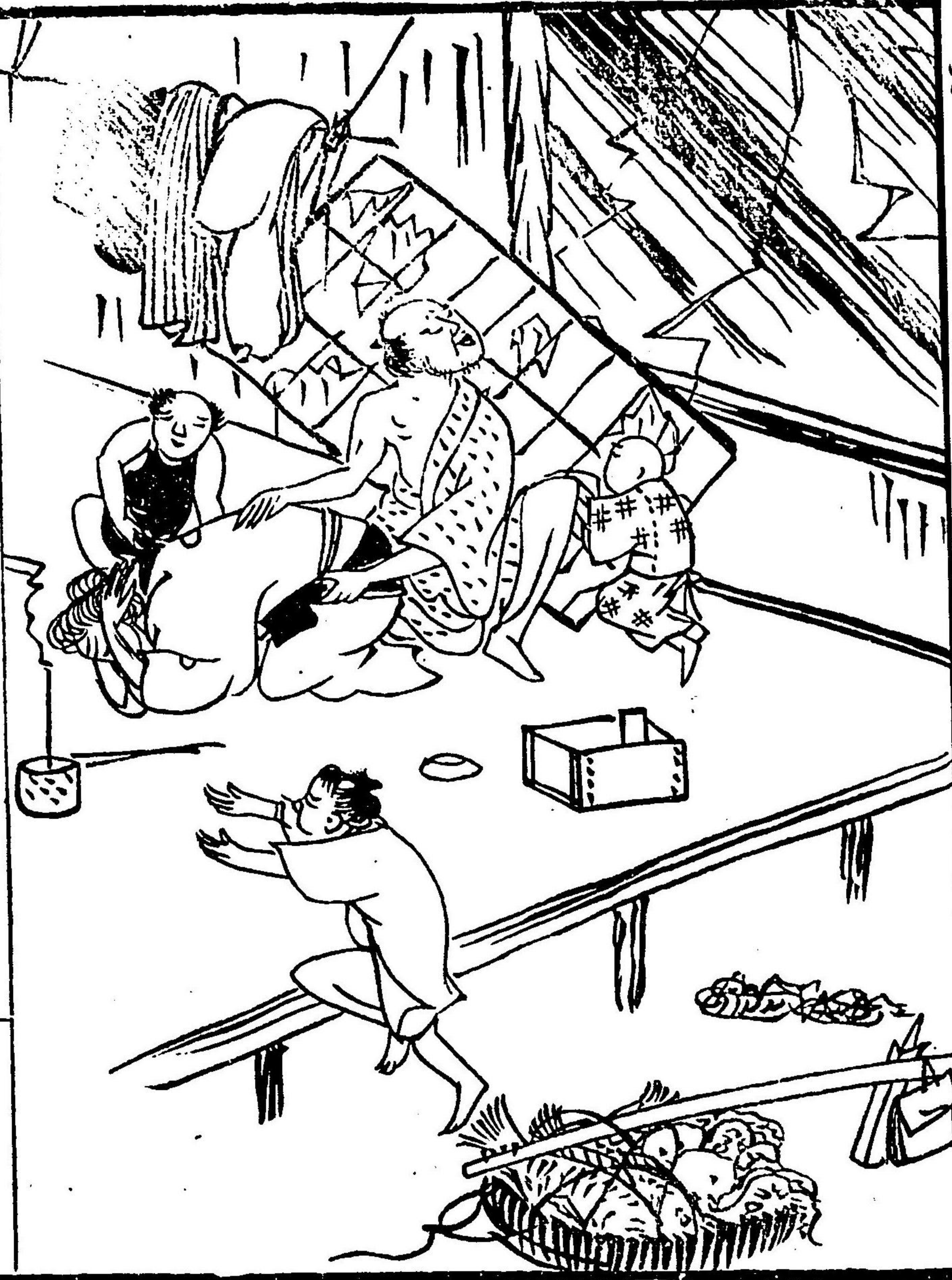
忠太郎。ハ。老。母。を。つ。く。て。孝。行。り。家。き。り。あ。て。お。身。  
 けれ。ど。物。も。す。か。ら。灯。を。あ。く。館。ふ。り。と。常。に。  
 母。の。か。し。を。ら。よ。ま。て。つ。れ。ぐ。さ。る。ぐ。さ。む。か。異。に。  
 有。る。日。も。と。母。が。け。よ。り。内。は。ま。ま。と。り。か。た。ち。あ  
 か。ら。う。ら。い。か。ま。し。け。て。これ。も。け。よ。り。休。息。せ。よ。と。  
 お。り。ひ。ひ。と。い。ひ。人。も。も。や。と。り。れ。ず。母。の。損



利どかへりて母の心よきことよ。妹一人あり。  
 これも孝あり。ともは。年老ゆれど。母よつうの  
 こと。れさえぐ。て。おま。つくたひ。とるく。母の  
 おき出るよ。あ。ごうひ。お。も。ら。う。く。痛ること  
 あり。ず。と。寛政四年。三月廿一日。米をた。ら。たま  
 りりける。お。た。あ。時。よ。年。六。十二。あり

○仁保源七  
 ○坂村友四郎

源七ハ父理助をやく死。ひとり。母と居ぬり。源七  
 をかき取り。漁師よ。と。と。れ。て。毎。と。あ。つ。ひ。と。め





賃をいりて母をやしきふ。母いして老ては、舟子と  
 やめ、魚をうりて母をともくむ。母もと、魚あきとひ  
 せしは、源七、魚行家よりうけしる。魚をせしづ。母よ  
 こせし。そのあひひきぬ。あひきぬ。あひきぬ。あひきぬ。  
 その日、あひひきぬ。母よりうけし。あひひきぬ。あひひきぬ。  
 それ、あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。  
 やすくうりて、あひひきぬ。源七よりうけし。あひひきぬ。あひひきぬ。  
 して、又とのあひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。  
 天よ、い魚あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。  
 すくよ、あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。  
 もち、あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。  
 せし、あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。  
 けり、あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。  
 業す、あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。  
 もの、あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。  
 甚し、あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。  
 あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。  
 せて、あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。あひひきぬ。



よとらりよ入てあすあす母送溺するハ一と  
 あれば源七己が恙あつてめたる衣を母よきかせて  
 そのけがれたるをばあひ火をもとてかひ  
 鄰の人えあやみてたづねゆきこと度く  
 ありとりよ源七をやく妻とてうゝひそのほい  
 一人してかく孝養とてむあそれるものなり  
 寛政四年三月廿一日米五俵たすりける源七時  
 一と五十二よりまご坂村よ貞四郎とりの民あり  
 これも漁師よあともれまご一と一と一と一と一と  
 親又つふすつりければ同五年正月十八日米三  
 俵賞賜せらる。

○矢野村由存左衛門

由存左衛門ハ大に徳をつとめて人もあまごかし  
 つくひぬるが性孝としておれまごつりまごことか  
 らすまごつらるるせり染十八九の頃父の病氣を  
 よく看護し死は熱傷すること涼くし母ハ酒  
 どののむ由存ら外ありともその時をかんとて  
 家よかへつらつら酒をあつてめまごのめして



すむ母のめとつゞきもこのて奥す母まの物  
 語と好むおあたりせものどもよびつとて昔今の  
 ことかたらせこれの母の腰るごもてさすのつ  
 びくある時公事あり夜分よ出立て城下よゆく  
 舟越の嶺までゆけるが染おもしろく母子を  
 らうせしめて夜分すぎよあらずとさすよの  
 老と城下よやりての夜分すぎよ染るごよのひを  
 かりてゆり夜分てひしるる七凡えさからぬこと  
 ありて外よさすもことあれは日よ人さうして  
 母の安否とよ見かあまことあり甚むしませう子  
 より甥姪よりして十二三人同居せりこれよ  
 ことひとしくあらし寛政五年七月十五日米五俵  
 あたつて買せらる。

○上流聖村茂と妻女すま

すま父茂も南も良民として農業としてあはと勤  
 ことあつたものなり子に風流のあつたあつた  
 まつれり母やしてさすこと九年たかりて  
 身まかりぬその時すま十四か染るひのさすのひ



つめーこと。成人よまされり。身孫市。痲痺とやうて。  
 昼夜もあまの夜もあまの夜も。妹よあまの痛風もて。熱湯を  
 ついて。六年がかりも。足たずりけるを。すま。心の  
 かぎり。いこりて。妹よ。日は三夜づつ。糸をすーと。  
 とふるものあり。すま。四年の。る。とこたらず。糸をすーと。  
 あつ。ける。父いよく。老て。けれ。すま。はよ。いく。いも。  
 食物を。すめ。酒をも。たえす。のま。む。暮。預。父。ら  
 たいむ。ふ。られ。た。谷の底まで。たづ。ひ。て。り。ぬ。熟。掃。の  
 ころ。よ。ち。る。と。人。と。た。の。こ。と。て。ハ。老。の。待。こ。ひ。ぬ。る。が。





ためよ。つらつら木よ。よりのむり。なりすむすか。又衆  
業を。そげそし。田わら。孝ぎり。聖の。ひも。ふよ入して。  
木を。こり。後ハ。か。りて。機を。おる。その。勤勞。たごひ。  
まれる。り。寛政五年。十二月。穀日。米。十俵。たまりて。  
孝友と。あら。り。す。ふと。年。三十二。あり。

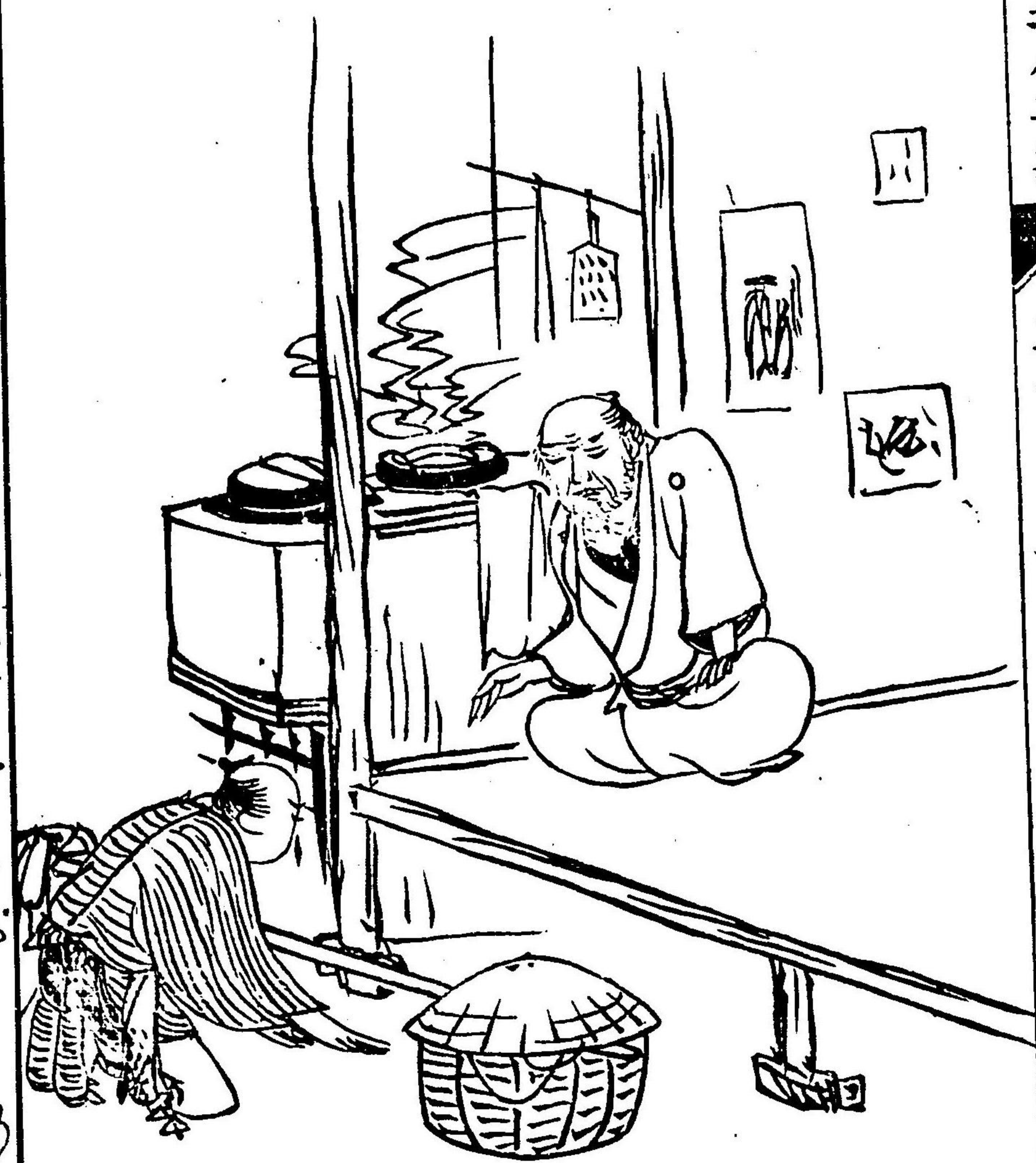
○江田 碇 森 右 衛 門

森 右 衛 門。幼少。母。よ。ま。れ。父。林。右。衛。門。つ。ま。り。  
孝。ま。り。か。れ。い。と。け。る。ま。時。す。り。父。を。敬。ま。り。ま。り。  
して。い。く。あ。そ。び。たり。め。れ。あ。り。と。も。父。を。い。て。い。  
二。三。の。時。より。父。う。足。よ。そ。く。病。い。ま。り。つ。つ。り。て。  
そ。か。せ。け。る。一。年。父。病。よ。お。し。たり。か。れ。業。を。こ。う。す。  
睦。を。合。さ。る。凡。六。七。十。日。と。かり。ま。り。と。り。又。兄。を。  
う。や。ま。ひ。兄。の。み。る。こ。と。を。だ。て。け。る。も。殊。殊。  
ある。こ。と。あり。妻。も。夫。よ。ま。り。ひ。て。よ。く。ま。り。と。よ。  
つ。ふ。親。族。の。内。も。か。れ。よ。化。さ。れ。て。性。の。あ。ら。た。  
ま。り。た。る。者。も。あ。り。け。る。と。も。寛。政。五。年。十二。  
月。穀。日。米。五。俵。あ。り。と。ら。る。ほ。七。年。あ。り。て。又。









十五の時母とてうらむひて。数十日さきかきりあり。  
 是後、<sup>はた</sup>徳母よつうて、ぬんごらあること、<sup>かうが</sup>実母よこしこ  
 ろし、<sup>いせ</sup>妹四人あり、皆人よ嫁して、子もあまごを  
 父かゝるべし、よびよするよ、時とて、一、時よ、い  
 あつむること、も、又、<sup>おが</sup>多し、<sup>いえ</sup>費も、すくふからぬと、能  
 いとるみ出で、常よ、のとか、よ、せて、ぬ、<sup>い</sup>中よ、<sup>すく</sup>後  
 あれど、ひとく、<sup>え</sup>涼、<sup>あ</sup>せ、<sup>い</sup>けれ、<sup>い</sup>バ、<sup>い</sup>徳母も、<sup>い</sup>甚、<sup>い</sup>より  
 こびける、寛政五年、十二月朔日、米五俵、よ、ま、り、  
 同十一年、七月、亦、一日、<sup>え</sup>あ、<sup>い</sup>く、<sup>い</sup>び、<sup>い</sup>賞、<sup>い</sup>を、<sup>い</sup>か、<sup>い</sup>する。



○戸坂村七か七回帰きまら妹ひちち 附才ちち

七か七ハ父を長ち病つとり小老て中風をやく十四  
 五年もつりり七か七涼くうれひて田畠を治弟は  
 昔むかしのち父がい醫業いぎやうの費とちせり今は田も  
 のころすくまければ人の田をもつりまて人よ  
 やとりれまど一ていとがすうまれば父よそのか者  
 めるものをもつてすも母と食するもあ  
 よまもさい母よくか母よあやまあしくんす  
 七か七うれひて今日けふ何なにがしよともしよからすもて  
 ちかひあめひなるもつりて母よのこりめん  
 近まみよ叔父しやくふの家あり七か七叔母しやくぼよたのこて母も一  
 ありてはれんもつりたびく物ものたう一いちあり  
 やと問とがあつとんだくまればちひける母もい  
 病まひよふしければ七か七さらようれひてはもまたか  
 るらにい醫業いぎやうのつと力をよりばるい獨語ひとりごとするに  
 人きしてちかもつりまのつりるれども老おい人の  
 せまひいたせりちかい醫師いしよたのちちかへち  
 用もちひつりともたかへちかちちちちちちちちち



孝養七つをいふに、この孝は、  
引かゝるが、かゝりて、不孝のついでに、  
さまぐらひぬ、才を盡す、  
いとありれよ、おもひ、  
かゝりて、  
おこらぬ、  
うちをいひ、  
堪下よ、  
折く、

孝養七つをいふに、この孝は、  
引かゝるが、かゝりて、不孝のついでに、  
さまぐらひぬ、才を盡す、  
いとありれよ、おもひ、  
かゝりて、  
おこらぬ、  
うちをいひ、  
堪下よ、  
折く、



つじぎちぎしして病人の替めものにかたきして  
すめけるよきよらしてかたきものたたりかくあいら  
がれどたぐ茶果をもめ履をうらち繩をさるひして  
やいひとたすいふくしういものよとよりあいらぬ  
ことちれび利もあいらぬれど人ありれりいんあ  
買ふかくとせへかきかたきものいんいんあ  
ちるれすしてつうぐねいもぐらあもてやすまも  
あいらぬららもあいらぬ病人をらぬむ  
まことよありれちるはらうし寛政五年十二月  
朔日よ二人の費として米十五俵をたすりり  
才ちあもも袋鉢とごとくもと下されける。

○戸坂村茶と七惣左衛門

茶と七惣左衛門のいともよ孝順としてあうも物よいん  
よく村人をさしていひいよよいぬめずいこの茶  
死喪ゆきしてたすけずとらひいさるし茶と七の牛も  
五疋もちけるが二疋は己が用としてその餘は  
人よかしてつうぐめける惣左衛門が家の代は長壽多く  
曾祖父の百八茶祖父の八十茶茶として終り父の平八と



りよ八十七。夫婦つごう相あすあやあらあり。寛政五年十二月廿日。  
ああらありあのあ銭せんをあたあまある。

○ 濃戸せとしまの太師平ただい代忠だい孝たか信のぶ

おおきおのおもと。波なみ多た見み浦うらのうきうらうり。廿に日じづづりりまます。  
太師平ただいが父ちち秀ひで左さ衛ゑがが家いへ又また来きりりつつうう。農いんぎよ業ぎよより  
して。商まがう賣ばいののここととままぐぐ。ままめめややららままををおおららひひけける。  
秀ひで左さ衛ゑのの死し。太師平ただい十じゅう條じょう染せんままして。家いへををつつぎぎに。  
おおきおのお心こころ力ちからををつつぎぎににままりりまます。SSののかかららいいままああれれびび。  
いいくいたいびいもも。つつぎぎににままりりまます。成せい成せいののいいせいああ。









考て、すづーく、るや、いければ、孝女の、おを、ひく、寛  
 政七年、六月、十四日、銀、之、百、五、十、兩、た、ま、り、り、け、る、そ、の  
 銀、ハ、村、長、が、あ、つ、り、年、々、の、利、息、を、あ、つ、め、あ、さ、が  
 衣、報、を、い、と、る、み、飢、寒、の、そ、も、く、ま、り、け、る、と、い、ふ。

○倉橋の、棺、之、助、妻、き、く

き、く、ハ、吳、村、太、前、助、が、む、す、め、る、り、十、七、八、の、以、棺、之、助、が、  
 妻、と、る、り、一、二、三、年、一、て、姑、や、ま、ひ、ま、か、り、て、ま、  
 是、も、も、く、ま、ひ、れ、一、を、き、く、看、お、ひ、を、ゆ、め、す、一、と、  
 介、保、す、る、と、い、ふ、す、で、よ、十、年、よ、ま、よ、一、の、一、と、せ、疫、  
 癘、流、行、し、て、棺、之、助、も、や、い、け、る、と、い、ふ、か、を、つ、く、一、と、  
 疾、病、一、け、る、と、い、ふ、お、婦、の、な、よ、か、も、く、と、い、ふ、甚、多、一、

寛政七年、十二月、五日、米、五、俵、た、ま、り、る。

○教言、固、を、村、ま、ち、馬、夫、婦、○蒲、刈、下、崎、新、之、助

半、ち、馬、夫、婦、母、よ、く、つ、う、あ、る、と、い、ひ、て、天、明、四、年、寛  
 政、三、年、も、夜、堂、を、か、う、し、る、傳、初、編、よ、い、ぬ、と、い、ふ、  
 孝、心、れ、と、り、い、は、れ、が、同、一、九、年、十、一、月、廿、一、日、か、ま、  
 米、七、俵、か、つ、け、ら、る、と、い、ふ、第、三、の、費、一、と、い、ふ、か、ま、  
 六、十、一、よ、い、ぬ、新、之、助、も、新、状、初、編、よ、い、ぬ、一、初







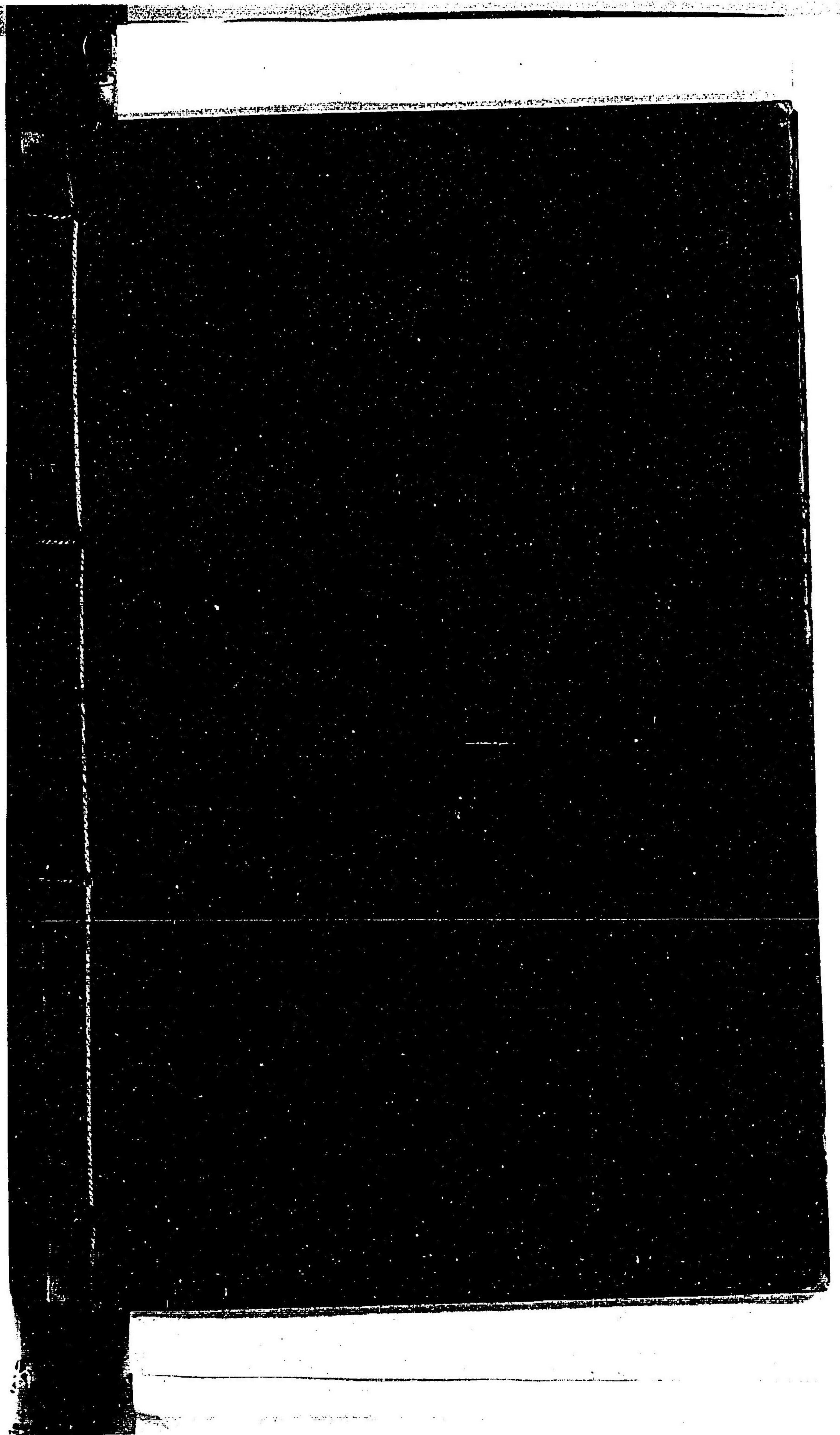
その人よあつよかれ家産あつきよもあらざ一畝の  
 田宅をうるべきやどよありたるよその行を改めず  
 事ごとくに孝廉の人とりよべ。寛政九年十二月八日  
 銀式被たすりりてなめられけるよしは若松よりあ  
 もの女子あり若松をやく死し母と居りけるよ  
 母麻痺をどうづらひて志うも月さく志ひけるよし  
 かぎりなくあされよまへつうやいさひしこと  
 あすこの年をいよけれど佳景と回白よ米五俵  
 たすりりぬ

藝備孝義傳二編卷二終



134  
6  
268







國孝義傳  
卷之三

004323-004-4

134-268

芸備孝義伝

頼春水/著

M18

ACE-0761

